

学会ニュース

目次

・2014年度学会費納入のお願い	1
・第36回大会について	1
・共通論題趣旨説明 (1) : 「18世紀の海の道」	高橋博巳・堀田誠三 2
・共通論題趣旨説明 (2) : 「啓蒙とフィクション」	斉藤 渉 3
【研究動向】		
・忘れられたイデオログ、バトラー主教：バトラー研究は興るか？	有江大介 4
・事務局より	7

2014年度学会費納入のお願い

代表幹事 長尾伸一

2014年4月より新たな会計年度となりました。払い込み用紙を同封いたしましたので、年会費の納入をお願い申し上げます。年々、会計状況が厳しくなっております。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

第36回大会について

今年度の第36回大会は2014年6月21日（土）、22日（日）の両日、福山市立大学で開かれる予定です。開催校責任者は堀田誠三会員です。

共通論題が2題開催されます。共通論題（1）は21日（土）開催で、「18世紀の海の道」で、コーディネーターは高橋博巳会員です。共通論題（2）は22日（日）開催で、「啓蒙とフィクション」で、コーディネーターは斉藤渉会員です。（次ページ以降の趣旨説明をご覧ください。）

大会の詳細は同封のプログラムをご覧ください。

多くの会員が大会に参加されるよう、お願いいたします。ご出欠は同封の葉書でお知らせください。5月30日（金）までに までご返送ください。

18世紀の海の道

コーディネーター・司会 高橋博巳 (金城学院大学)
司会 堀田誠三 (福山市立大学)

福山市立大学で18世紀学会大会の開催をお引き受けすることになり、開催地にふさわしい共通論題として「海の道」を提案した。というのも、大会の開催場所が本学の主要施設が存在する「港町キャンパス」だからである(別に「北本庄キャンパス」がある)。港町というように、本学は瀬戸内海に面しており、この地理的条件に触発されて、「海の道」の発想がうまれた。多島海の景観を眺め、空気がくっきりと澄んだ日には四国までが見渡せ、海は人と人、また人の住む地域を隔てると同時につながるものでもあることが実感される。

このことは洋の東西をとわず普遍的な事象であり、鉄道が登場する以前には、海上交通が人と文物の交流を支える主要な手段であった。18世紀においても快適かつ迅速な交通手段としては、陸をゆく馬車や徒歩などより、当然ながら海をゆく船のほうが優れていた。共通論題では地域性にとらわれず、知と文化の共鳴と醗酵の基盤という観点から「海の道」を取り上げていきたい。そのさい「海の道」をたどる「航海」と、その発着地ないし経由地としての「港」を考察の対象に入れることも必要であろう。航海中や寄港地での非日常的な強い閑暇は、知的文化的営為への誘因として機能するにちがいないからである。

(以上、堀田誠三)

そこで18世紀の「海の道」を展望するに先立ち、18世紀から19世紀にかけてこの瀬戸内海を船で往還した人々の目を通して、当時の瀬戸内の風景を再現しておこう。寛政九年(1797)18歳の頼山陽は、叔父頼杏坪に伴われて関東に向かう舟のなかで、「島嶼つゞき、舟帆来去する佳麗の景は、芸備の辺を第一とすべし」(『東遊漫録』)という御国自慢とともに、スケッチをのこしている。スケッチは鞆の浦の手前で終わっているが、ここは朝鮮通信使従事官の李邦彦による「日東第一形勝」、ならびに洪啓禧・啓海父子による「対潮楼」の額で知られた名勝である。明和元年(1764)の通信使をこの港で応接したのは、豊後岡藩の中川修理大夫久貞家中の柴山寛猛たちだった。その後輩にあたる田能村竹田はのちに瀬戸内を往還して、《亦復一楽帖》(天保元年、1830)の〈順風舟行図〉の賛に、「置酒賦詩」、「一千五百里」を「唯兩日」で移動する瀬戸内海航路の快適さを特筆している。そうした船旅の楽しみは《船窓小戯帖》(文政十二年)の〈蛸売り〉の図、ならびにそれを独立させた《売章魚図》に横溢している。ここでの見所は、ふつうの文人画家ならば「銅臭」といって嫌う銭差〔コイン〕をわざわざ描いていることである。さらに《三津浜図》(天保五年)では、依頼者「酔樵雅契」こと松田渙卿の家のすぐ傍に、賑やかな魚市の競売の場面が描かれ、文人画のなかに平然と経済活動が紛れ込んでいる。奇しくも竹田が訪れる直前に頼杏坪も立ち寄って、「海上争いて立つ玉嶼岫、近くは則ち笑うが如く遠くは則ち顰むがごとし」(「松田渙卿の九霞楼に登り、見る所を賦して主人に贈る」、『春草堂詩抄』七)と眼前の光景を活写していた。菅茶山もまた、「登登庵の松島詩巻の後に題す」に、「勝を荒陬に尋ねて留まること幾句ぞ。帰り遺る一軸、郷隣を照らす。山陽三万六千島。恨むらくは図を携えて北人に誇らざりしを」(『黄葉夕陽村舎詩』巻六)といって(享和元年、1801)、多島海の魅力では松島に負けていないと自負している。蕪村の「高麗舟のよらで過ゆく霞かな」(明和六年、1769)の一句は朝鮮通信使船の面影を幻想的に伝えているが、琉球使節やオランダ東インド会社の人々を運んだ船も同様に、北前船などに混じって行き交っていた。

さて共通論題では、ヨーロッパからはバルト海を旅したヘルダーの場合、「海の道」を経て伝わっ

たカトリックの問題、そして朝鮮通信使が伝えた戦争情報、琉球使節が18世紀に有した意味などが様々に論じられる。「海の道」の魅力が再認識するよすがともなれば幸いである。

(以上、高橋博巳)

第36回大会共通論題(2) 趣旨説明

啓蒙とフィクション

コーディネーター 齊藤渉(東京大学)

イマヌエル・カントが啓蒙の条件として提起した「理性の公的使用」は、著作を通じて公衆に語りかける著者が「自己自身の理性を用い、自己自身として話す」ことを要件としていた。一方、18世紀には、狭義の文学的テキストはもちろん、文学外テキストにおいても、さまざまなフィクションの使用が確認できる(哲学や科学や政治の問題が、架空の人物同士たちの会話として描かれるなど)。ジョン・サールの定義によれば、フィクショナルな言説は、著者が主張などの発話行為を行なう「ふりをする」こと、言い換えれば、架空の登場人物や語り手である「ふりをする」ことによって成立する。著者に自己自身として語ることを求めたカントから見れば、それは「理性の公的使用」の埒外にあることになる。だが、だとすると、18世紀に見られる多様なフィクションの使用は、「啓蒙の世紀」にとってイレギュラーなエピソードになってしまうのだろうか。むしろ、この「フィクションの公的使用」は、時代を特徴づける単に偶然的でない現象と見なされるべきではないか。

共通論題「啓蒙とフィクション」では、膨大な数にのぼる18世紀のフィクション使用のうち、いくつかの事例を取り上げ、その理論的考察の枠組みを提示するとともに、それぞれの地域や文脈によるフィクションの機能の多様性を考察する。もとより、可能な事例を網羅的に論ずることは望むべくもないが、そこに見られるいくつかの重要な思想史のアスペクトの抽出を目的としたい。

はじめに、齊藤渉が、「啓蒙とフィクション」という問題設定の説明をおこなう。報告では、まず久保昭博が、サールやシェフェールなどの代表的著作を取り上げつつ、文学理論の立場から現代におけるフィクション論の主要な問題点を整理する。大崎さやのは、ゴルドーニの演劇作品を例に、フィクショナルなテキストと18世紀ヴェネツィアの市民道徳の連関を探る。また、隠岐さや香は、科学史の観点から、古典確率論の描く人間像と哲学的フィクションの関係を論じる。(ほかもう1名の報告を予定)

研究動向

忘れられたイデオログ、バトラー主教：バトラー研究は興るか？

有江大介（横浜国立大学）

バトラー（Joseph Butler : 1692-1752）は、キリスト教弁証論の歴史において、第一に、その自然神学的基礎付けと理神論に決定的打撃を与えた蓋然性（probability）論とによって、英語圏のキリスト教国において繰り返し言及される重要な聖職者・神学者である。また、第二に、人間の利己心から出発する彼の道徳理論は、人々の行為を利己心とそれを規制する良心との関連において考察するという、教会が繰り返し主張する伝統的な禁欲主義とは大きく異なった内容を持っていた。そして、利己心を自然的なものとするバトラー主教の説教が、本人の意図を越えて、勃興、発展する18世紀前半の商業社会とそれを領導する新興商人の心性に対する教会側からの対応となったのは言うまでもない。この点において、バトラーは、ホップズやロック、シャフツベリやハチスン、そしてヒュームやスミスやリードとの接点を持っている。

19世紀前半の権威ある文献で、「[イングランド国教会の]最も卓越した能力を持った高級聖職者、ダラム主教」と記述されている（Robert Watt, M.D. *Bibliotheca Britannica; or A General Index to British and Foreign Literature*, Vol. I. Authors A-H. Edinburgh, 1824, p.178a. <BL shelf mark: RAR/090.16>）バトラーの主要著作は *Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the constitution and course of nature*. London 1736. と *Fifteen Sermons, preached at the Chapel of Rolls. To which are added, Six on Public Occasions*. 1726, 1749. である。

「一体どうしてこんなことになってしまったのか、私にはわからないが、近頃キリスト教はまじめに考えるべき主題ではなく、フィクションであることがついに明らかになったと考える人々が沢山現れている」（*Analogy*: ADVERTISEMENT）という危機感のもとに、強い護教的な意図をもってバトラーは登場した。そして、「18世紀前半における正統的教説のすべての擁護者のうちで、バトラー主教は通常最も効果を挙げたとされており、彼の『宗教の類比』（*Analogy*, 1736）は我々の主要な主題と重要な関連を持っている」と現代でも評価されている（Willey 1940; 三田・松本・森安訳1975年、86頁）。

この主要な議論は上記の第一の点に関わる。すなわち、自然的対象に対しては実験と観察によって帰納的に獲得された事実から、人間的対象に対しては感覚や印象、自然的欲求と言った身体的経験からまずバトラーは出発する。そして、典型的にブリテン経験論の系譜に依拠するこの枠組みにおいて、認識を超越する神の存在という問題に正面から対処している点である。それをモスナーは「人間と自然に関する諸事実をありのままに検討し、それによって人間の経験を越えた事物の蓋然性を示す試み」（Mossner 1936: 81; 小田川 1996: 125頁）と概括している。バトラー『類比』の登場前に、アンソニー・コリンズ、トマス・ウールストン、マシュー・ティンダルらによって、奇蹟批判、『聖書』の合理的解釈、聖職者批判がなされ、それがウールストンの逮捕（1727-29）に至るほどに政治化していた。その一方、神の超越性に対する人間理性の限界を踏まえることで、『聖書』に示された超自然現象の擁護を目指したトマス・スタックハウス、ジョン・コニビア、ウィリアム・ロー、トマス・シャーロックらの国教会聖職者達からの反撃が1730年代に始まっていた。

こうした状況を一変させたのがバトラー『類比』であった。そもそも人間の知識に確実なものはなく、すべてが蓋然的なものに過ぎない。すべて過去に経験した事柄との類比を導きの糸として、現実や将来の事象がどの程度「ありそうなこと」なのかを推定するのであって、奇蹟とはその場合、ただ単に“極めて蓋然性の低い出来事”に過ぎない。つまり、奇蹟の有無を問うこと自体が非問題化してし

まうのである。また、理神論者の認める神による世界創造も蓋然的知識に過ぎないとしたら、神の世界創造を承認すれば奇蹟も蓋然的に存在することを認めることになってしまう。こうした巧妙な攻撃によって、18世紀中盤に理神論の勢いは大いに失速を余儀なくされた。バークが「この40年間に生まれた人間で、コリンズやトーランド、ティンダル、チャブ、モルガンなど、自らを自由思想家と名乗った一党の全体について、何か一言でも読んだものがあるだろうか」（『フランス革命の省察』1790）と言っているわけである。もちろん、認識の枠組みについてのバトラーのこうした志向性は、歴史的にもヒュームの懐疑論、J.H.ニューマンの信仰論、L.スティーヴンの不可知論などが大きく影響を受けている。この蓋然性論はバトラーに言及するケインズの『確率論』（*A Treatise of Probability*, 1921；『ケインズ全集』第8巻、86, 87, 341, 342, 355頁）までつながる。

第二の論点は、バトラー道徳論の反理性主義である。ヒュームによって「5人の先駆者」（坂本 2005: 233頁）の1人（ロック、シャフツベリ、マンデヴィル、ハチスン、バトラー）に位置づけられているが、それは人性に基づく実験的方法 ‘*experimental method based on human nature*’ (Coventry 2007: 32) である。つまり、人の道徳判断は人間の自然的な感覚や感情の媒介抜きには成立し得ないと考え、独特の人間精神の3層構造論をバトラーは提示する。最下層に欲求・情念・情愛、中間層に利己心・仁愛、そして、それらを統御する位置に良心を置く。もちろん、キリスト教的前提として上に立つ良心は“神の声”であるものの、超越的ないし生得的な良心に収斂するのみでは現実に意味ある道徳判断はなし得ないとする点が正統的な説教とは異なる、時代精神への対応としての現実的な、あるいは折衷的なバトラーの特色である。2000年代に入って、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教のそれぞれの内部や異なった宗教相互間の対立、衝突、紛争が頻発する中で、例えばバトラーの憤慨 (*resentment*) と許し (*forgiveness*) の教説が改めて参照されるのも、“宗教の時代”に対するキリスト教的知性からの対応の試みと言えよう (Newberry 2001; Pritchard 2008; MacLachlan 2010; Garrett 2012;)。世俗性の高いわが国には見られない、倫理的・哲学的・宗教的な現代世界へのアプローチの一例である。

また、経済思想を見た場合に、イングランド人ロック (1632-1704) の経済論の後に何もなく突然一足飛びにスコットランド人スミスまで至りそこを起点としてスミスの自由主義的経済論の側面がイングランドおよびブリテン全体に拡張していくという像が一般的であった。仮に言及されるとしても、プライス (1723-1791) やプリーストリー (1733-1804) といった社会的には少数派で異端視されていたイングランドの非国教徒の急進主義者達の経済的議論に限られていた。上の欠落を埋める議論がバトラーの利己心の説教にあってもおかしくはなからう (池田 2005)。理神論者や自由思想家、ノンコンフォーミストやディセンターといった反体制的な思想家、ボイルレクチャーに関連した高教主義派 (*Latitudinarian*) を典型とする体制派選良の高級知識人などは脚光を浴びているが、イングランド国教会に集まりイングランドの政体を現実に支えている大多数の世俗的一般人に対応する議論には光があたっていない。実際に歴史を担い動かしているのは変わり者の賢者ではなく、彼らから見れば単に計算高いだけの無数の愚者達なのではないだろうか。特にわが国では顧みられることも稀なバトラーについての検討は、当の本人も含めて忘れられた思潮を掘り起こす端緒となりうるのではないだろうか。

以上のような問題意識のもとに、筆者は最近、もう一度バトラーを、18世紀の文脈の中で検討し直すべく、「思想史におけるJ.バトラー」と題する次のような内容の科研費による研究集会を企画した (於：横浜国立大学、2月8日)。

木宮正裕 (京都大・院) 「J.バトラー：憤慨と許しに関する論争のサーヴェイ」、大久保正健 (杉野服飾大) 「啓蒙主義への二つの対応：バトラーとエドワーズ」、長尾伸一 (名古屋大) 「リードはバトラーをどう読んだか」、有江大介 (横浜国大) 「バトラー蓋然性論の射程：宗教と科学」、小田

キリスト教人口が総人口の1%に満たないわが国では、思想史研究においてキリスト教に関わる議論はその重要性に比して乏しい。また、そうした研究が信仰を持つ研究者の範囲を越えて広がることは少ない。わが国のバトラー研究にも壁があるようである。そのような中で、関心のある本学会員諸氏の協力の下に、バトラー研究の今後の充実化を目指したい。また特に、わが国で既にこの領域の研究を進めておられる会員の方、注目すべき文献をご存知の会員におかれては、筆者までご連絡頂ければ幸いです（arie@ynu.ac.jp）。

<引用・主要参考文献>

The Works of Bishop Butler, LL.D. Late Lord Bishop of Durham, 2 vols., Edinburgh: Walker and Greig. 1813.

White, David E. (ed.) (2006) *The Works of Bishop Butler*, 1 vol., Rochester: University of Rochester Press.

Brinton, Alan (1991) "Following Nature" in Butler's Sermons', in *The Philosophical Quarterly*, 41(164), 325-332.

Cunliffe, Christopher (ed.) (1992) *Joseph Butler's Moral and Religious Thought: Tercentenary Essays*, Oxford University Press.

Coventry, Angela M. (2007) *Hume: A Guide for the Perplexed*, London: Continuum.

Garrett, Aaron (2012) 'Reasoning about morals from Butler to Hume', in R. Savage ed., *Philosophy & Religion in Enlightenment Britain*, Oxford, pp.169-186.

MacLachlan, Alice. 2010. 'Resentment and Moral Judgment in Smith and Butler', *The Adam Smith Review*, Vol. 5, F. Forman-Barzilai ed., New York: NY, pp.161-177.

Mossner, E. C. (1936) *Bishop Butler and the Age of Reason*, New York: The Macmillan Press.

Newberry, Paul. A. 2001. 'Joseph Butler on Forgiveness', *Journal of History of Ideas*, Vol. 62, No.2, pp.233-244.

Orr, J. (1934) *English Deism: Its Roots and its Fruits*, Michigan: WM. Eerdmans Publishing Company.

Penelhum, Terence (1985) *Butler*, London: Routledge & Kegan Pall.

Pritchard, Michael. S. (2008) 'Justice and Resentment in Hume, Reid, Smith', *The Journal of Scottish Philosophy*, Vol. 6, No. 1, pp.59-70.

Suttor, Timothy (1966) 'Bishop Joseph Butler's Place in the English Tradition', in *CCHA Study Session*, No. 51, 11-23.

Weitzel, Shelby. 2007. 'On the Relationship between Forgiveness and Resentment in the Sermons of Joseph Butler', *History and Philosophy Quarterly*, Vol. 24, No. 3, pp.237-253.

Willey, Basil (1940) *The Eighteenth Century Background*, London: Chatto and Windus. 三田博雄・松本啓・森松健介訳『18世紀の自然思想』みすず書房、1975年。

有江大介（2013）「J.H.ニューマンの知識論」有江編『ヴィクトリア時代の思潮とJ.S.ミル』三和書籍。

大久保正健（1998）「理神論の系譜」鎌井・泉谷・寺中編『イギリス思想の流れ——宗教・哲学・科学を中心として——』北樹出版

小田川大典（1997）「『発展』と『蓋然性』——バトラー、ニューマン、アーノルド」行安茂編著『近代イギリスの倫理学と宗教——バトラーとシジウィック——』晃陽書房。

大津真作（1986）『啓蒙主義境界への旅』世界思想社

池田和央（2005）『イングランド経済思想の宗教的起源——国教会聖職者による経済思想の系譜——』（未刊行博士論文）

坂本達哉（2005）「ヒュームにおける社会科学の生誕」中才敏郎編『ヒューム読本』法政大学出版局、230-253頁。



事務局より

本学会の幹事を務めていただいていた安西信一会員が、本年2月10日に逝去されました。安西会員は18世紀研究上の優れたご業績に加えて、本学会運営上でも長年にわたり、多大な貢献をしていただきました。美学界、18世紀研究および本学会にとって、大変重要な方を失いました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

日本18世紀学会代表幹事 長尾伸一

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。事務局移転に伴い、郵便振替口座も変更となりました。今後は以下の振込口座へ会費の納入をお願いいたします。

<郵便口座振替で振り込む場合>

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会事務局

<銀行等から振り込みする場合>

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにした論文以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴァル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org> → ISECS-direct ; フランス語版ではRépertoireという項目です。そこから人名や国名に従って探せます。）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者（Pascal Bastien: admin@isecs.org）に連絡してください。（英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。）

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方については、日本18世紀学会事務局から国際18世紀学会のサイト管理責任者にお名

前だけ知らせてあります。そのような事情で、お名前はすでに記載されているはずで、なるべく自分で上記アドレスにアクセスして、公表したいデータを登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（上記サイトの画面上部のISECS-directまたはRépertoireボタンから名簿にアクセスできます。）

※※名簿データ変更の必要がなくても、国際学会のサイトをご覧ください。国際学会に関する情報のほか、シンポジウムなど各種の情報が掲載されています。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『○○』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、例えば「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限ります。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

寄付のお願い

寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。

学会への献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

- ・坂本達哉『社会思想の歴史ーマキアヴェリからロールズまで』名古屋大学出版会、2014年、388頁

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくご願ひいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお昨年9月より、新しいメーリングリストを稼働しております。これまでメーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：王寺賢太（国際幹事）、大石和欣（常任幹事）、大野誠（常任幹事）、隠岐さや香、小田部胤久（国際学会執行委員）、川島慶子、小関武史（常任幹事、年報担当）、斉藤渉、坂本貴志（常任幹事、年報担当）、武田将明、玉田敦子（常任幹事）、寺田元一（東アジア交流担当）、長尾伸一（代表幹事）、馬場朗、逸見龍生（常任幹事、年報担当）、増田真

会計監査：安室可奈子、真部清孝

日本18世紀学会ニュース 第75号 2014年5月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 長尾伸一

事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局

e-mail: jsecs.nagoya.uni@gmail.com

tel: 052-789-2380

fax: 052-789-4924

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>